

trilobum S. & Z.) よりも遙か下帯にあるから實に面白い事實である、勿論其處は生態條件は他と著しく異つてゐる、住友銅山の直ぐ傍だから誰しも見學すべき處である。

此赤石山に *Euphrasia* の一種で極めて蕞爾たるものを産する、ホソバコバメグサ區 (*Angustifolia*) のもので新種であるから、ナヨナヨコバメグサ (*Euphrasia microphylla* KOIDZ. n. sp.) と命ずる。高さ 9—5 cm. 莖は繊細糸状にして下より少しく分枝し又は單莖なり、白い微毛を生ず。葉は狭細楔形にして、長さ 1—4 mm に過ぎず、無毛にして先端に三齒を有するのみ、苞亦葉状にして微小形三齒あり、藻内に種子は一、二ヶを有するに過ぎず。

Euphrasia (*Angustifolia*) *microphylla* KOIDZ. n. sp.

Caulis minute albo-puberulus, 5—9 cm. altus, gracile tenuissimus, a basi pauciramosus vel simplex. Folia anguste obcuneata 1—4 mm. longa glabra utrinque dente unico praedita. Capsula margine minutissime ciliolata seminibus in utraque loculo 1—2.

Hab. Japonia: Prov. Iyo, mt. Akaishisan.

抄 録

大石三郎氏: 日本レーチック世植物の研究 (S. ŌISHI: The Rhaetic Plants from the Nariwa District, Prov. Bitchū. 北海道大學理學部紀要、第一卷第三及四號、p. p. 257—370, t. t. 19—53, 1932) (Rhaetic Plants from Prov. Nagato. 同上第二卷、第一號、p. p. 51—67, t. t. 9—10. 1932)

日本群島に於ける化石陸生植物の最古の Flora は三疊紀最上部のレーチック Flora である、何人も我國本土の最古陸生植物區系の一般を知らんと欲する人は宜しく此著者傾注の本論文を一覽せられん事を薦める。本論文は殊に本邦 Rhaetic Flora の豊富なる備中國成羽町附近産に就き従來及び著者の綿密なる探究の結果を綜合せしもので、大なる努力の跡は歴々たる近來の快著である。

中生植物代 (Mesophyticum) は、有名な古生植物代の二疊石炭紀植物群の後を受けて新に二疊紀後半世に始まり下部白堊紀まで繼續したもので、之を三紀に分ち得る、古紀は二疊紀後半世より三疊紀前半世まで、中紀は三疊紀後半より中部侏羅紀まで、而て新紀は上部侏羅紀より下部白堊紀 (Komancheum) 迄である。前紀の植物區系は第一に先づ二疊石炭紀植物の殘留が可なりあるが原始羊齒類 (*Primo-filices*) や *Cordaites* は全く絶滅し、羊齒類ではゼンマイ科、ヘゴ科、タカワラビ科等が始て

起り、松柏類では *Ulmannia*, *Voltzia*, *Pseudovoltzia* 等が始て起つた時代である、中紀の植物は羊齒類のヤブレガサウラボシ科、*Matoniaceae* 等が始て起り他のリウビンタイン科と共に中々盛大であり、裸子植物では銀杏類、蘇鐵類 (*Cycadophyta*) が大に盛である、尙松柏類、木賊科も可なり盛であつた。後紀はリウビンタイン科、ヤブレガサウラボシ科、*Matoniaceae* 等は衰へ、ウラボシ科 (*Polypodiaceae*) が起つた、裸子植物では蘇鐵類と松柏類 (*Coniferales*) とが盛である。

レーチック世は中紀の半頃であつて、大石氏成羽植物のみにても木賊類六種、羊齒類二十五種、*Bennettitales* 二十種、*Nilssoniales* 九種、銀杏十三種、松柏類八種等計八十二種で内二十三種は新品である、而尙未詳品が十七種ある、以上の内最優勢なのは羊齒類であつて、眞羊齒類は古生植物時代には實にあるかなしか位の寥々たるものであつたが中生植物代に於て大に優位となつたのである、次は *Cycadophyta* で木賊、銀杏及松柏は比較的少ない、然し木賊類の如きは種類は少ないが *Neocalamites* の如きは個體の数は非常に多い。Flora の要素として特に注意すべきは矢張り Gondwana の要素である *Phyllothea* (木賊科) や二疊石炭紀 Angara 要素である *Annulariopsis* の残留及び post Gondwana 要素として三疊紀 Gondwana の植物なる *Yabellia* (*Bennettitales*?) の存在である。

次に成羽植物層はすぐ脇の海成層なる *Pseudomonotis* 層との關係は實に重要な事項なれども甚難解の状態にあるので幾多層位學者の頭を悩まして居る、即ち *Pseudomonotis* 層は *Pseudomonotis ochotica* なる二枚介の示準化石を含むから明に上部三疊の Noric 階を示すものだが植物層亦全體の性質は Noric の上であるレーチックからリアス階のものたるを示してゐるのに、植物層は海成層の下に整合に現れ又は上に現れるなど解し難き現象で或人は古い海成層が新しい植物層の上に押しかぶせとなつたと云ふ、赤木理學士は植物層を下として海成層より古きものとなし、且つ兩層非常に接近してゐるから同一時代の共に Noric 階のものであると云ふ。

頗る困難な難解の地點なるが、植物層はレーチックの性質を帶ぶる事他遠隔地方の其の如しと雖も、赤木理學士の云ふ如く又 Noric のものと考へ得ざる事もあるまいと抄録者は考へる、其は未 ELIAS 氏の説は知らざれど、一般に東亞は下部二疊紀以來他地方よりも非常に、*Mesophyticum* の色彩が濃厚で、一般に他地方よりは先んじて中生植物代の分子が現れたらしい、其で Noric にも既に Rhaetic flora の性質があつたと解し得ぬ事もあるまいかと思ふ。

(G. KOIDZUMI)